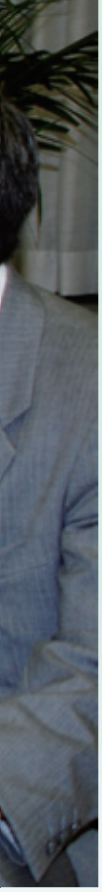


私から見た土地改良

篠田昭 新潟市長に聞く

〝土地改良は新潟の生命線〟

新潟日報の記者時代から土地改良を見つめてきた新潟市の篠田昭市長に、記者時代の田中角栄氏や佐野藤三郎氏の取材にまつわる思い出話や新潟市の農業振興策として掲げている「ニューフードバレー構想」などについてお話を伺った。

聞き手●中川　敬夫
飛島建設株式会社審議役、(公社)日本技術士会農業部会幹事、(一社)土地改良建設協会技術委員会委員、平成七年から十年まで新潟県農地部農地建設課長として勤務。

写真右　中川　敬夫
写真左　篠田昭 新潟市長

実家は流作場の篠田旅館

中川　本日は、お忙しい中、貴重なお時間をいただき、ありがとうございます。

市長は新潟市のお生まれで、地元の新潟高校を卒業されておりますが、まずは、その頃の思い出から伺いたいと思います。

市長　私は、新潟市の流作場（沼垂町）というところで生まれました。そこは新潟駅などがある東新潟で、萬代橋を渡った西新潟（旧新潟町）に新潟高校がありました。東西の新潟は、環境や文化・歴史も異なり、新潟町と沼垂町が一緒になるということは大変なことだった、と萬代橋を渡るたびに思い出します。

また、高校は海岸の松林に近いところにありましたので、授業をさぼって松林のあたりで寝っころがっていました。坂口安吾さんも、あの辺りを散策し日本海を眺めたり、松林を渡る風を聞いて、いろいろなことを考えていたのではないか。新潟もんの特徴と言えば、やはり、日本海とともにあるというイメージが強いと思います。

中川　ご実家は旅館を営まれておられたとか……。

市長　ええ、篠田旅館と申しまして、旧新潟駅の前と現在の駅の近くに二軒やっておりました。多くの方々がやってこられ、幼少の頃から、大人の酔態などいろいろな面を見せてもらっていたような気がします。初めての異文化体験として、新潟港が北朝鮮への帰還港でしたので、旅館に見送りの在日関係者が宿泊した時、風呂場で聞いた朝鮮語に自分の耳がおかしくなったように感じたことがありました。

中川　高校時代の部活の思い出などは……。

市長　私は難儀なことが嫌いで、スポーツや文化部の活動はやらずに、それこそ松林などで遊んでいた口ですから、あまり誇るべき高校時代の思い出はないのですよ。

ロシア語学科に後悔

中川　その後、上智大学の外国語学部に進学されましたが、どうして外国語学部を選んだのですか。

市長　親父は、旅館もやっていましたが、日本通運に勤めていました。港関係の支店におりましたので、市場にはロシア人も多く来ていましたし、外国語学部で一番入りやすかったのがロシア語学科だったこともありまして、ロシア語学科に入学しました。しかし、あんなに難しい言葉だとは思わなかったものですから、入ってすぐ後悔しました。そんな軽い気持ちでしたが、当時の新潟市の雰囲気に多

少影響されていたかもしれません。あの頃新潟市は、対岸貿易など対岸に活路を見出すといったことを、当時の渡辺浩太郎市長が主張しておられましたので。

中川　ロシア語ということで、環日本海時代を先取りされておられたのでは。

市長　いや、まさかこういう立場になるとは思っていませんでしたから、そうであれば、もう少し真面目にロシア語を勉強していればよかった。姉妹都市のハバロフスクの市民の前で、冒頭だけでもロシア語でご挨拶すると、とても喜んでくれます。

新潟日報に入社し、角栄チームに

中川　大学を卒業後、新潟日報社に就職されましたが、それはどういう想いからですか。

市長　商社の内定が決まっていましたが、卒業間際、一考した上で親父に相談すると、私が商社には向いていないという話になりまして、マスコミを受けることとしました。ところが、にわか勉強で受かるほど甘くなく、ことごとく落とされまして、あとは、地方紙かスポーツ紙しかありません。地元の新潟日報も受けてみるかといった具合で、最初から新潟に帰ってくる気持ちはなかったのですが、結果的に新潟日報に拾ってもらったわけです。

成績が悪かったから東京紙を落ちて新潟日報に入った、ロシア語ができなかったからマスコミに入った。ということは、できないことは必ずしも悪いことではない、と言い訳に使っています。

中川　記者の時代で思い出の深い出来事は、なんでしょうか。

市長　新潟と言えば当時は田中角栄さん。田中さんがロッキード事件で逮捕され、東京紙が優秀な記者を何チームも送り込み、新潟のことを好き勝手に書いていました。当時の新潟三区が刑事被告人・田中角栄を何の反省もなく、選挙に送り出している、愚民たちだと、東京紙は〝愚民報道〟を行いました。これは勘弁できない、では、その田中角栄をどのような気持ちで今も支持しているのか、新潟日報は後援会である「越山会」の思いを聞いて、田中角栄を支持する新潟三区の風土と政治はどういうものかを、東京紙と全く違う視点で報道することにしました。これが「風土と政治」というシリーズで、新潟三区を廻って一年間取材を重ねました。このことが一番印象に残っています。

その後、ロッキード判決選挙で闇将軍が二二万票を獲得しました。そこで、田中角栄さんに頼り切っている新潟でいいのかと、やがて田中さんも力を失う、当時、「午後三時

の太陽」と言われていましたが、新潟日報は、自立自助の地域づくりが必要だとの考えから、「地域おこし」シリーズを始めました。このように角栄さんをめぐる一連のシリーズのチームに入れてもらったのが印象に残っています。

土地改良は新潟の生命線

中川　論説委員も経験されていますが、土地改良事業については、どのように捉えられていましたか。

市長　新潟三区を取材していた時も、土地改良事業がこんなに大変だったとか、角栄さんにこんなことをやってもらったと聞いています。やはり新潟は、中山間地域か低平地で、どちらも土地改良が米を作っていく上での生命線であると、いろいろな人から聞いています。

　低平地のチャンピオンは亀田郷と西蒲原で、まさに全国の両横綱であり、西蒲原には鷲尾貞一さん、亀田郷には佐野藤三郎さんという凄い人がいると聞いていました。新潟市は米作り、田んぼが生命、それを機能させている土地改良事業は新潟にとっての生命線だというふうに、記者時代から認識していました。

中川　土地改良事業による亀田郷や西蒲原などの排水機場の整備によって新潟の農業は大きく変わりましたからね。

市長　昭和二十三年に農林水産省の国営事業阿賀野川地区により、当時は東洋一の規模を誇る栗ノ木排水機場が完成し、今まで臍まで浸る田んぼでやらざるを得なかったのが、耕地整理ができるぐらい乾田化されたことも、耳にタコができるくらい聞いていましたし、ポンプが回らないとまた水浸しになるという話もそうです。

　排水機場でポンプを回していくことが、新潟にとって絶対不可欠であるという認識は、身に沁み込んでいますが、都会の方に土地改良を説明するのは難しい。我々からすると、生きていく上で絶対必要なことをやってくれているのが土地改良であり、ポンプ場だと思っていました。

芦沼　腰まで水に浸かっての稲刈り

昭和23年完成の栗ノ木排水機場は、当時東洋一の規模

佐野藤三郎氏に学ぶ

中川　亀田郷といえば、作家の司馬遼太郎氏が、『街道をゆく―潟のみち』で「大変な傑物」として紹介された佐野藤三郎氏について、取材されたことがあれば、その印象をお聞かせください。

市長　佐野さんには本当に多くのことを教えてもらいました。記者時代、私は市役所を二度ほど担当しましたが、その時の最大の情報源は佐野さんでした。佐野さんはまちづくりについても、当時都市問題懇談会メンバー一〇人のうちの一人でありました。いろいろなお話の中で、一番びっくりしたのが中国の黒竜江省三江平原開発の話。三江平原の面積を問うたら、なんと一千万ha。佐野さんは、一千万haを何とかしてくれと当時の中国の副首相から頼まれた、とおっしゃっていましたが、そのスケールの大きさに度肝を抜かれました。

　新潟は都市と田園がまさに共存しているが、佐野さんは、都市と田園を混交させてはいけないと主張なさった。その考え方が、鳥屋野潟（とやのがた）の南西部開発の乱開発防止につながり、県と新潟市と亀田郷で協定を結び、秩序立った開発を実施しました。それが今の、「HARD OFF ECOスタジアム新潟（県立野球場）」、「新潟スタジアム（デンカビッグスワンスタジアム）」、新潟市民病院など

を誕生させました。このような整然とした開発ができたのは、佐野さんのリーダーシップ抜きには考えられません。

そのような意味で、佐野さんは、新潟市のまちづくりにも大きな功績を残しましたし、新潟が環日本海拠点都市を目指す方向付けも行ってくれました。ハルビン市と新潟市を友好都市にしたのも佐野さんの力で、その翌年、新潟県と黒竜江省の友好提携が実現しました。新潟の国際化も彼が牽引してくれたのです。〝土地改良区の親父〟というレベルをはるかに超える、まさに大変な傑物であります。

新潟市の中心部に位置する鳥屋野潟の水面は、海水面よりも低い

新潟市長選で田園型政令指定都市を掲げる

中川　新潟日報の論説委員を経て、市長は平成十四年十一月から新潟市長にご就任されていますが、市長選に出馬された理由は何ですか。

市長　新潟市長は助役が市長になるのが通例でしたが、そろそろ民間の血を入れた方がいいという声があり、私もその尻馬に乗って騒いでいました。助役側は盤石の体制を敷いていましたが、私は「手垢のついていない普通の市民が出れば、新潟市民は絶対に応援してくれる」と余計なことをしゃべっていたら、じゃあお前が出たらどうだということになりまして、何か引くに引けないような状況になりました。とても任にあらずと思ったのですが、成り行き上、やってみるかということになりました。

中川　「田園型政令指定都市」を掲げましたが、その想いとは何ですか。

市長　政令指定都市になる、大都市になるということだけではない、どうせならかつてない政令指定都市をつくろうといろいろな人と議論しました。そこで、地域を大切にする分権型の政令都市、次に、大地の力を大切にする田園型政令市、そして、環日本海の拠点である日本海政令市、この三つの都市像を明確にして進もうとマニフェストを作りました。

新しく誕生した新潟市のデータ、例えば、日本一の水田面積などを示し、三つの都市像において自立するための四〇のプロジェクトを実行する必要性を訴えました。この合併マニフェストは相当の反響があり、何万部も売れたと記憶しています。新潟の特徴を示す都市像の一つに欠かせないのが「田園型政令指定都市」であり、これを掲げさせていただきました。

新潟は「水と土の王国」

中川　新潟市は「水と土」をテーマにした『水と土の芸術祭』を開催されていますが、それも同じ想いからですね。

市長　新潟市は開港五港の一つの港町と、日本一の美田地帯が一緒になりました。平成の大合併では、最大規模の合併として一五市町村が一つになりました。いろいろな要素が入り交じっているので、新しい新潟市の都市イメージをどう市民に説明するか、あるいは、よその人にどうアピールするか、とても難しいのです。最初は、「食と花の政令指定都市」とか「田園型政令指定都市」など言っていましたが、議論を重ねる中で、新潟市は港町も田園地帯も日本一の信濃川とそれに次ぐ水量を持つ阿賀野川、この二つの母なる川から育て

られているのではないかと、それは、信濃川と阿賀野川が日本一の大量の水を運び、大量かつ多様な土を運ぶ、そこからできたのが新潟市だという考えに及びました。

『大地の芸術祭』の総合ディレクター・北川フラムさんが、「新潟は水と土の王国だ」という話をされたわけです。全くその通りで、我々は日本一の水と土を大切にし、それに先人たちの日本一の闘いを忘れないように、そして、日本一の水と土を少しでも良い環境にして後世に伝えようじゃないか、ということで、野外アートを芸術祭という形でやろうと、『水と土の芸術祭』のネーミングも北川さんが考えてくれました。これは新潟にぴったりのテーマだと思いますが、市民からはいろいろな批判もあり大変でしたが、去年三回目を迎え、基本的には新潟は水と土を大切にしなければならないという気持ちはかなり広がったと思います。

先日、ＮＨＫの「ブラタモリ」でも紹介されていましたが、土砂、新潟弁ではベトと言いますが、ベトの中で一番大変なのが砂です。砂丘列と低湿地帯の連続性で新潟の特異な地形はできているわけです。「ブラタモリ」を見て、改めて水と土の意味が理解されたようです。これから、水と土の環境を良くして伝えていくことに、力点を置いていきたいと考えています。

中川　そのような意味でも、農業水利施設を将来に向けて適切に保全管理し、次世代に引き継いでいくことが重要だと思われますが。

市長　そうです。新潟がまちとして成り立つためにも、排水機能は欠かせません。大型の排水機場については、その保全管理への意識は十分あるのですが、中型・小型のものまでなかなか手が回りません。今まではコシヒカリの価格の中で（他の地域よりも高い）土地改良経費を飲み込めましたが、米の価格が低迷し始め、低湿地帯で農業を続けることが厳しい条件の下で競争にさらされているわけです。

現在の温暖化の状況からすれば、北海道ではなく新潟が条件不利地域だと言っても過言ではありません。このような厳しい排水状況が常なるところを条件不利地域として認定してもらい、それなりの支援をお願いしたい。ポンプの電気代や改修・補修費をどうするか。亀田郷では排水路の南斜面に太陽光発電用のパネルを設置し、少しでも電気代を賄おうと先進的な取組を行っています。

ニューフードバレー構想と一二次産業化

中川　新潟市の農業・農村政策についてですが、市長の農業振興策の柱である「ニューフードバレー構想」とは何ですか。

市長　旧新潟市は元々農業のウエイトが低く、新潟市になっても農業政策はあるのか、など色々な方々が心配されておりました。合併した農業地域でも、農業政策の目玉について大したものが出てこない。そのような中、まずは、「がんばる農家支援事業」の実施で、国、県では支援できない機械・施設等の整備を支援し、農業を下支えしています。

一方で、新潟は食品加工産業が盛んで、昭和の時代にフードバレーをつくりました。その代表例は亀田製菓ですが、最初、でん粉から水あめを作っていたところが世界企業になりました。そこで、田んぼから生まれた世界企業を見習い、二一世紀に新しいフードバレーを再構築しようと、国が推進する農商工連携や六次産業化にあやかり、それを「ニューフードバレー」と名付けました。

県の食品研究所が食品産業を育てた歴史があり、その研究所や亀田製菓からの人材をはじめ、農業活性化研究センター、食品加工支援センター、バイオリサーチパークなどの研究機関も併せ、新潟ニューフードバレーの形成に向けて取り組んでいます。最終的にはオランダ型をめざし、お金を稼げる六次産業化を育成します。

中川　「農業の一二次産業化」も提唱されていますが、こちらはどのような取組ですか。

市長　大地の力をフル活用することを全面に出せないかと考えました。三重県の「伊賀の里モクモク手づくりファーム」の木村さんにアドバイザー

をお願いしていますが、議論の中で私の主張は一〇次産業（農業の六次産業化に加え、「子育て」、「教育」、「保健・医療」、「福祉」）ではないかと指摘してくれました。さらに、もみ殻・間伐材等のバイオマス資源の提供など「エネルギー・環境」という分野、そして田園・大地の力をフルに活用しようとすると、「交流」が発生すると。この二つを加え、言葉遊びかもしれませんが、一二次産業化としました。

反論も多々ありましたが、農業特区が軌道に乗ってきたら、〝結構面白いね〟との声もあちこちで上がり、今後、一つ一つの分野を更に充実させ育てていきたいと思います。

子どもの農業体験と食育を推進

中川　市長は、子どもの農業体験や食育を重視されていますが、どのような効果を期待されておられますか。

市長　私どもはフランスのナント市と交流を深めています。フランスも農業、食育を非常に大切にしており、ナント市の教育ファームを視察させていただくと正規の授業の中で農業体験と食育が行われていました。日本はというと、給食までパンになってしまった。地域の一番の宝物である農業、食の素晴らしさを、子どもの時から刷り込んでいくことが、〝地域愛〟の大きな源になるのではないかと、日本版教育ファームを新潟から取り組み始めました。

教育委員会がその気になるかが勝負だと思っていましたが、当時の小学校校長会長さんが農業体験の面白さだけではなく、教育効果を上げるアグリ・スタディ・プログラムというカリキュラムの必要性を指摘し、教育面からも磨きをかけてくれました。

ですから、今では、全国トップレベルの農業体験学習や食育が行われています。その前には、完全米飯給食も実現しました。地域の素晴らしいものを子どもたちに味わってもらおうという流れの中で、抵抗なく受け入れられたのだと思います。

中川　「いくとぴあ食花」や「アグリパーク」といった素晴らしい施設も開設されていますね。

市長　新潟市が〝食は健康、花は癒し〟をめざすには、食育と同時に花育も必要だとの声が花農家を中心に上がってきましたので、「食と花の政令市にいがた」のショーウインドー、また、子どもたちの健康的な育ちの場として、鳥屋野潟のほとりに、まず、「食育・花育センター」を造りました。それから、「こども創造センター」、「動物ふれあいセンター」など、食と花をメインテーマに、子どもから大人まで様々な体験と交流ができる施設をそろえ、「いくとぴあ食花」という憩いのスポットとしました。ここへ来ていただきますと、新潟市のめざす方向が理解いただけると思います。

「アグリパーク」は、農業体験を全ての子どもたちに、それも宿泊までできる教育ファームを実施する場と、ニューフードバレーの支援施設を併

子どもたちの田植え体験

いくとぴあ食花全景

せるような、新潟の特徴を伝えられる施設であると思います。

ケネディ駐日大使がアグリパークを視察

中川　六月には、ケネディ駐日アメリカ大使が、この「アグリパーク」を視察されたとお聞きしましたが。

市長　ええ、当初この施設でいいのかと少し心配しましたが、ケネディさんはとても気さくな方で、好意的に受け取っていただいたようです。ちょうど、子どもたちが農業体験学習を行っていたところに加わるような形になりまして、子どもたちにとっても、ケネディさんは好印象に映ったようです。やはりアメリカの方は、大地、農地に強い思い入れがあるように感じました。

　また、意見交換会では、ローソンのパートナーである二〇代の農業青年が積極的に意見を述べるなど、ケネディさんは、農業特区にも強い関心を示されたご様子で、有り難い視察になったと思っています。

中川　たしかに「食花」をテーマに、四季を通じ多くのイベントが開催され、観光客が多数訪れていますが、海外からの旅行者を受け入れるインバウンドの取組についてはどうですか。

市長　インバウンドの数はまだまだ少ないです。昨年、ハルビンとデイリーで結ばれた時期には、新潟空港から新潟駅周辺で一泊するケースがありましたが、この方々を町まで引き出せてはいません。今後、台湾の定期チャーターが実現しますので、以前台湾のプログラムチャーターのアンケートで受けのよかった〝佐渡の砂金採り〟をはじめ、〝新潟の芸妓さん〟など芸妓文化や花街文化を外国の方に見てもらう。G7やAPECなどもそうなのですが、芸妓さんがおもてなしすると、外国の方はとても喜ぶので、芸妓文化や花街文化をしっかりアピールする必要があります。

　また、アグリツーリズムも有効です。外国の方が農家で昼飯を食べたりしますと、これもものすごく喜びます。本当は、農家民泊まで行きたいところですが、残念ながらまだそこまでは。農家レストラン、植物工場等をネットワークにしたアグリツーリズムも、インバウンドに十分対応できるのではないかと考えています。

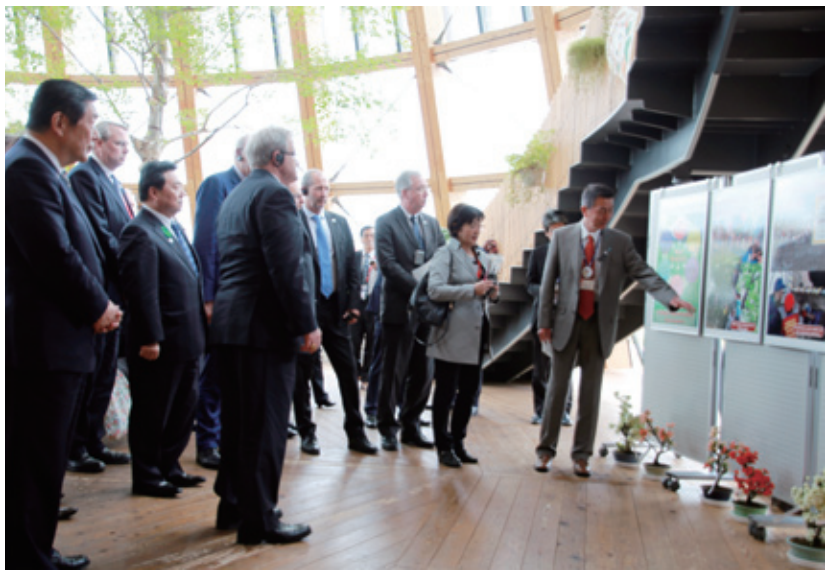
　それと、新潟―会津若松―米沢―庄内―新潟という広域観光ルート。国の方の広域観光ルートでも、首都圏―北関東―新潟という位置付けとなっていますので、新潟、群馬、長野が組むと温泉・スキーとなり、新潟は受け入れ・送り出し口として、広域観光のまとめ役になるのがインバウンドを推進する一つのポイントではないかと思っています。

ケネディ大使　小学生と交流

農業特区とG7新潟農業大臣会合の開催

中川　先ほども出ましたが、国家戦略特区いわゆる農業特区ですね、これに指定されどのような変化がありましたか。

市長　普段なかなかお会いできない大企業の社長さんが、新潟に来られました。ローソンの玉塚元一社長（現代表取締役会長CEO）、NTTドコモの加藤薫社長（現取締役相談役）をはじめ、規制緩和以外の分野でも日本を代表する大企業が、どうせ農業をやるなら新潟で関わりたいとおっしゃる。新潟の農業の魅力は、世界を相手にしている大企業のようなところも関心を持っていてくれていることだと、けっこう自信につながりました。ローソン、セブン&アイのパートナーには



G7農業大臣会合の視察先（いくとぴあ食花）で農業大臣らに説明を行う篠田市長

二〇代の農業者がなっており、若くとも志を立てればこのような大企業のパートナーになれます。ともかく、新潟農業はアピール力が強いことを、いろいろな方が理解してくれた、それはとても有り難いことです。

中川　今年四月にはG7新潟農業大臣会合も開催されましたね。

市長　今回は、県警や海上保安庁のおかげで安全の土台の上に、新潟の食と農をアピールすることができました。新潟が農業特区に指定されていたことから、EUの代表部の方が、G7以外の国の農業担当者に農業特区について説明してもらいたいとか、ケネディさんや石破茂地方創生担当相の視察をはじめ、様々な方々が商談の相談に来られたり、会議をやって終わりではなく、その後の波及効果を成果にしていくことが大事だと思っています。

中川　食料生産のための基盤づくりが土地改良の本務と考えていますが、一方で、国土保全などにも関わっています。最後に、新潟市の今後の土地改良事業の課題や取り組みについてお聞かせください。

市長　低平地という現状の中で、まずは排水機場が動かなければ大変であるという基本認識の下、農業を持続可能なものにしていくことが重要です。それに、規模拡大が遅れているので、農地の大区画化を併せて行っていかねばなりません。新潟市は大規模だと言われましても、本当に大規模のところと比べると、田んぼが小さいわけです。あとは、集約の問題でしょうか。大規模に約三〇haを耕作する農家でも、田んぼが点在していて大変だと聞いています。これをできるだけ集約しなければなりません。あるいは、集約の過程でICT農業により、いかに負担を軽減し効率的にやるかです。

亀田郷の農業者がおっしゃっていましたが、今のまま後継者もなく高齢化していくと、一人最低二〇ha耕作しなければならないと。そのような農業を可能にするための土台は、やはり土地改良だと思います。このままいけば一〇年後限界を迎える時に、本当の大規模農業が新潟平野で展開できるよう、土地改良をしっかりやっていかねばならない。これが、新潟市の農業におけるミッションであると思い、農業特区の経験を踏まえながら前進していこうと考えています。

中川　本日はお忙しいところ、長時間にわたりインタビューにご対応いただき、新潟市の農業振興策、そして市長の土地改良への思いをお聞きすることができました。誠にありがとうございました。

篠田（しのだ）　昭（あきら）

新潟市長

昭和23年新潟市流作場に生まれる。新潟県立新潟高等学校、上智大学外国語学部を卒業し、昭和47年に新潟日報社に入社。編集局報道部長、編集局学芸部長、長岡支社報道部長、論説委員兼編集委員を歴任し、平成14年9月に新潟日報社を退社。平成14年11月に新潟市長に就任し、現在4期目。